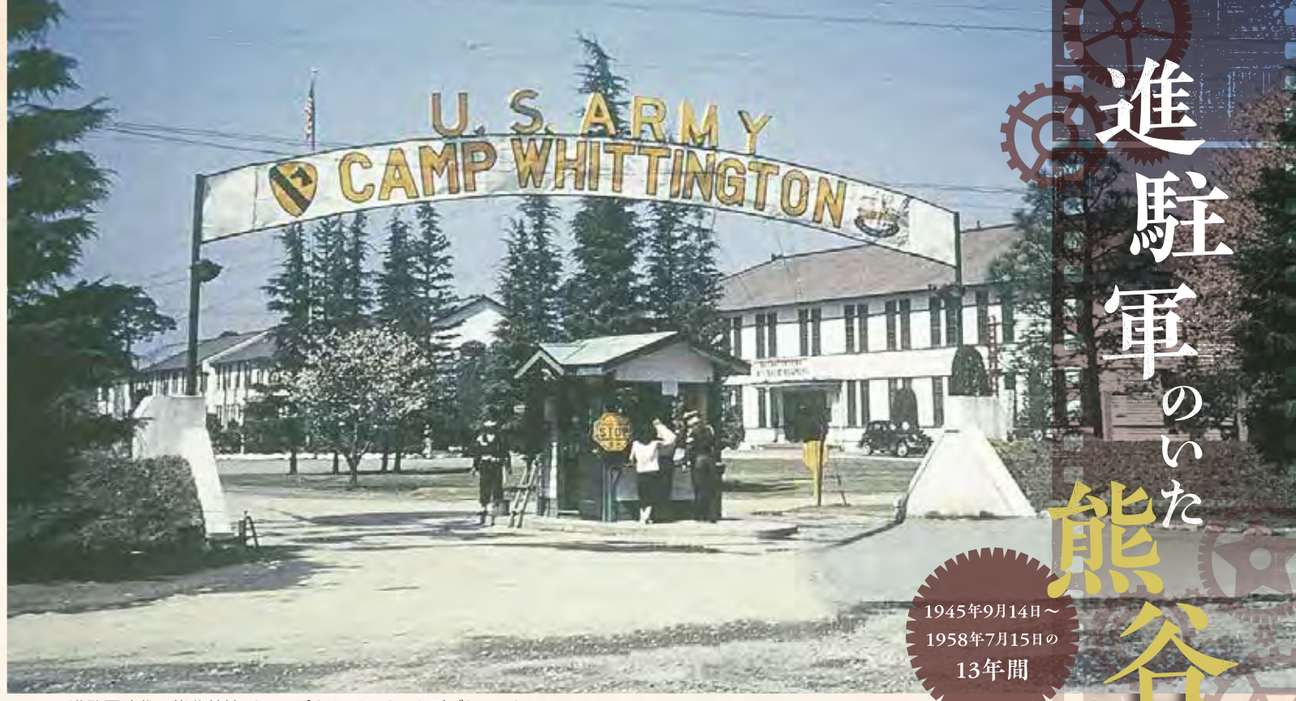
進駐軍のいた熊谷

1945年9月14日～1958年7月15日の13年間



進駐軍時代の熊谷基地。キャンプホイッチントンと呼ばれていた。

1945年8月15日は、熊谷にとって忘れられない日です。終戦間際、B29が熊谷を襲い、市街の大半が焼かれ、200名を超える死者が出た悲劇の日です。その悲惨な出来事は、これまでも折に触れて紹介されてきました。しかし終戦後の話は復興の様子を除いて、あまり言及されてきませんでした。空襲の翌月9月14日から熊谷には、1万人を超えるアメリカ軍が進駐し、13年間駐留が続きました。そうした記憶も戦前生まれの方が少なくなるにつれて、薄れつつあります。今年は沖縄復帰50周年。熊谷に進駐軍がいた頃は、どんな時代だったのか。振り返ってみることにしましょう。

8月15日の正午、ラジオから流れる玉音放送で国民は日本の敗戦を知った。未明に日本最後の空襲を受けた熊谷では、敗戦のショックとともに、まだ火がくすぶる焼け跡と遺体の山を前にして、明日のことを考える余裕はなかった。熊谷に米軍の本格進駐が始まった9月14日。そこから1958年7月15日までの約13年間が熊谷に進駐軍がいた期間となる。

現在、航空自衛隊熊谷基地となっている敷地には、戦前は飛行機操縦の基礎訓練をおこなう熊谷陸軍飛行学校が置かれていた。熊谷が空襲対象となったのは、飛行場の存在も一因とされる。戦後、キャンプ・ホイッチントンと名を改めて熊谷が埼玉県内最大の進駐軍拠点とされた。

本来、「進駐軍のいた熊谷」のタイトル通りにするなら、キャンプ・ホイッチントンがあった13年間を紹介すべきであるが、限られた誌面で全てを紹介することはできない。そのため今回は最初の1年間に区切り、埼玉新聞の記事を中心に紹介する。

マッカーサーがコーンパイプを片手に厚木基地に降り立ったのは8月30日。ここから日本の本格的な占領政策が始まる。埼玉県に進駐軍関係者が来たのは、9月5日。特別運行の列車で大宮駅を訪れて30分ほどで横浜に帰還した。熊谷進駐に鉄道が使えるかどうかの視察だったようだ。

熊谷に米軍がやってきたのは9月12日。狙いは飛行学校跡地。米軍将校と県内政部長が進駐に向けた打ち合わせをしている。

なぜ県内でも熊谷をいち早く占領したか。その理由は終戦前の米軍の本土上陸作戦が関係している。作戦案では九十九里浜と茅ヶ崎から上陸した米軍が東京を包囲。茅ヶ崎からの部隊が一部北上して、熊谷を占領し、北関東一帯を抑える手はずとなっていた(『相模湾上陸作戦』有隣新書)。この計画が下地となり、熊谷を北関東占領の拠点としたのである。

さて、14日未明、高崎線を使って米第43師団約1万人が熊谷に進駐完了した。埼玉新聞記者による手記があるので、引用しておきたい。(茶文字)

ローマ字の駅名を掲げた籠原駅の前には先陣を承るジープ1台が、1時53分の先遣隊を待っている乗員の兵2名、ガムを噛みながら高らかな声で話し合っている。オレゴン州生まれ生粋の米兵だ。

ポケットからフィラデルフィアレコードの1945年6月を取り出して、ひろい読みしているもう1人の兵隊は片手にジャムつきビスケットをつまみながらポンと景気のいい音を立ててビールの栓をあける。ちょっとピクニックのひとときといった表情だ。

「ふかしたての馬鈴薯があるが食べないか」と町の人がいうと、「食事をしてからまだ10分しかたたないから、いらない」という。先遣隊の到着時間にまだ1時間、なかなか退屈そうだ。

やがて先発の輸送指揮官(少佐)がトラックでやってくると間もなく第1列車約1300名の兵員がホームに入り込む。食料のズックを重そうにひきずりながら皆候疲れているようだ。路線ワイヤーにつまづいてだいぶ倒れたが格別負傷者も出ない。

食料をトラックに積み込み約20分できわめて平静に規律正しく駅前広場に集合。飛行場に向かった第1次進駐は約5000である。

これでかねて通訳その他万端の手配を完了していた熊谷署及駅側の努力の甲斐もあったというものだ。いかに平静に協調的な態度で進駐したかは次の微笑ましい小さな事件が、如実に語っている。

進駐の兵員は各自大きな荷物を担いで下車することとて、迅速に集合できるよう籠原駅長は改札口わきの柵を適当に取り払うことを申し出たが受取指揮官タリバン中尉は「単に我々のための配慮から駅の施設を打ち壊すことはできない」と応じなかった。駅長も事を敏速に処理するための処置だからと、その柵を速座に切り払って便宜を与えたのだった。(1945年9月15日付)

初公開資料

米国国立公文書館映像資料に見る戦後の熊谷

熊谷陸軍飛行学校跡で、焼却される飛行機

9月に熊谷に進駐してきた米軍の車輌群

資料提供:昭和館

進駐当日の新聞

●進駐当日の埼玉新聞では、「進駐軍の県民の心構え」(1945年9月14日付)の見出しで、県北民に注意勧告をしている。先行した神奈川では平和的な雰囲気で進駐が進んでおり、一部の兵士が命令の不徹底や言語不通によって不祥事を起こしているが、あくまでも県民は平静な態度をとるように告げる。

また、「進駐軍の対処は如何にしたらよいか浦和憲兵隊長との一問一答」(1945年9月14日付)という憲兵隊長へのインタビュー記事もある。町名を英文の表記にすべしとか、目につきやすいところに地図を掲げよといった意見を述べているが、関心は女性の貞操問題にあった。

「問題の起きた場合は隣組の人々が自己防衛に乗り出したり、また婦女子が一人ぐらいの時に屋内に侵入して武器を擬したとしても大声を出して付近の人々を呼ぶとか或いは命がけで反発していく方法をとることである。あくまで『貞操を死すとも守る』の信念のもとに身を守りたいものだ」「あまり挑発的な装いは結局異性を誘惑しやすいことになる。日本髪とか和服は一般婦人は着用せず、接待所あたりに限ってこれを使用することにしたなら彼等にも『ハハア彼女等は接待所の婦人か』というような意味で、反って一般婦人には何等の悪影響を受けずに済むのではないか」など、女性は自分の身は自分で守れと主張する。「憲兵の正しい心構えを持って必ず身を以て人民を保護するよう命令しているから安心してよい」とも言っているが、本当に守ってくれるか怪しい雰囲気がある。

また、キャバレーやダンスホールといった兵隊を接待する場所が必要とも述べ、「接待所は勝手な個人的経営はあまり効果的なものではない。(略)東京あたりでは指定地区内に接待所を作り、その出入り口は彼我の憲兵が取締るので、何事も秩序正しくいっている」とも提言する。つまり官公認の接待所を作り、憲兵が管理するというのである。

キャバレー・ザ・パロマ

●この提言を受けてかは不明だが、熊谷にキャバレーを作る話が持ち上がった。11月5日、石山・小此木・黒沢・堀口・吉田(本庄)の有志等が、星川通り沿いに進駐軍向けキャバレーを作るという記事が出ている。貸席を始め割烹、洋食などを設けた模範的キャバレーとするという。

翌年1月6日、進駐軍公認・近日開店として舞踊部員150名の募集広告が掲載。4月14日、キャバレー・ザ・パロマとして、キャバレー及び映画館がオープンした。しかし、経営はうまくいかなかったらしい。早くも7月21日には、経営不振のため松竹への身売り話が出ている。

道路工事

●戦後の道路は酷く荒れていた。そのため進駐軍から要請があり、県との共同事業として9月20日から大宮熊谷間の国道の修理に取り掛かっている。日本側でやると20日間と1000人の労働力が必要な工事を、進駐軍は重機1台で一日10キロも片付けると、記者は舌を巻いている。「兵営内の技術室をみせてもらったが、万事能率的にできているのには感心した」と、県土木課長もアメリカの技術力の高さに目をむく。工事開始から1週間後には、日本がやると2年かかるので、アメリカの優秀な土木技術を紹介することも併せて、進駐軍で工事を進めてもらえないかと援助を申し出て、快諾された。アスファルトなどの資材も日本では用意できずに、米軍から提供された資材で工事に当たっている。

進駐軍特需

●県内進駐が本格化すると、土産特需で色めき立った。米兵の土産として岩槻人形や押絵が好んで買われた。9月20日には熊谷市内に特売店ができたほか、進駐軍用の商品開発も進められて、進駐軍のみならず欧米向け輸出品に育てていこうという計画も持ち上がった。深谷の元伊勢屋呉服店や本庄の杉山呉服店でも土産物店を設置して大繁盛という文字が紙面を踊っている。ただ、人形はすぐに不人気になってしまったようで10月6日には一番人気のあるのは着物で持ち運びに不自由な人形などの買手は案外少ないとある。それまで弾薬箱などを作っていた木工場も土産物の玩具製造に転換を図っている。

また進駐軍の洗濯物2000着を1日で処理するクリーニング工場も建設された。人手不足のため、女学生が動員されて工場で働いた。

1年経つと、かつての軍需工場も民製品を作るようになる。月見町の熊谷航空株式会社は終戦と同時に閉鎖されていたが、8月10日からは進駐軍向の建築金具製造工場として1500名の工員を採用して再出発することになった。

記者が見た進駐軍

●進駐直後の9月17日、埼玉新聞では進駐軍少将へ取材を申し込むが拒否され、代わりに中尉へのインタビュー記事が掲載された。「街道を走るトラックからチョコレートを投げて、少年少女に拾わせているが、あれはどんな気持ちからか」と質問し、「コドモはみな可愛い。どこの国も同じだ。悪意でやっているのじゃない」(1945年9月17日付)と返されている。撒き餌のようにお菓子を投げ与えてくることについての記者なりの精一杯の抗議だったのだろう。他にも悪ふざけや立小便を止めて欲しいと要望している。ギブミーチョコレートと、お菓子に群がる子供たちは、占領されたとはいえ、大人たちのプライドを傷つける風景であった。

報道統制

●さて、今回参考にした当時の埼玉新聞には、進駐軍にとって不利な記事は載っていない。それは当時、GHQが検閲をおこなっており、進駐軍兵士の犯罪行為などは報道されなかったためである。(『「毎日」の3世紀―新聞が見つめた激流130年』毎日新聞社)

今回の聞き取りでも進駐軍の態度はおおむね紳士的だったとの証言があり、穏やかな占領であったことは間違いない。しかし、兵士による押売りや市民に銃口を向けるといった行為は日常茶飯事であったし、主権回復後に報道統制が解けると、米兵の犯罪行為が報道され、社会問題となった。進駐から始まったアメリカとのいびつな関係が正常なものになるには、より長い年月が必要となる。

【取材・文】矢嶋 正幸(やじま まさゆき)
〈現在〉日本民俗学会・埼玉民俗の会所属。NPOくまがや職員。國學院大學大学院博士後期課程文学研究科。当誌において畠山重忠12話シリーズ執筆中。〈受賞歴〉第10回櫻井徳太郎賞奨励賞(2011年)。平成29年度本田安次賞奨励賞(2017年)。

時代の証言

進駐軍時代を過ごした方に、当時の記憶を語ってもらいました。

HSさん

（大正15年生 江南出身）

私は江南生まれで、戦後になってから石原に嫁いできました。石原は三ヶ尻に行く追分ですから、進駐軍はよく目にしました。石原一丁目の交差点には、毎晩アメリカ兵が立って警備していました。

アメリカ兵が家にやって来ることもありました。家に入って来て「煙草を買わないか」と言うのです。夫に相談すると、買うというので、お金と交換して帰ってもらいました。小遣い稼ぎに来たのだと思います。当時は進駐軍のものを持っていると咎められる時代でしたから迷惑に思いました。

また近所の奥さんが、談笑中に兵隊を指さしたところ、怒った兵隊に追いかけられたという事件もありました。逃げに逃げて、トイレの中に隠れて難を逃れました。夜中に、米軍のトラックなどが、三ヶ尻に行くため引っ切り無しに通ったこともありましたね。大きな車が通るものですから、家が揺れて眠れぬ夜を過ごしました。

関根房子さん

（昭和9年生 大麻生下郷出身）

戦後になると、ホロをつけたトラックが秩父県道をよく走っていくのを見ていましたよ。子どもだった私は、トラックが来ると隠れていました。「ギブミーチョコレート」と言ったことはないけれど、米兵が缶詰やチョコを投げてくれたのを拾ったことはあります。家に持ち帰らず、子どもたちだけで食べました。味？　味はよく覚えてないけど、たぶん美味しかったんじゃないかな。

石山美江子さん

（昭和8年生 本町出身）

ちょうど私が熊女に入学した年でした。多感な時期でしたし、この頃のことはよ～く覚えています。女学校の先生から「兵隊さんがたくさん街に来るから一人で外出はしないように」と通達があり、一週間学校が休みになりました。私の家は本町で金物屋を営んでおりましたので、外国人のオンリー（愛人）となり所帯をもつ人がお鍋等を買いに来たのを、店の奥からよく見ていました。今振り返ると、本当に激動の時代でしたよね。

藤間憲一さん

（昭和21年生 本町出身）

私の家は、小泉にあった米軍基地の設備工事を受注していました。米軍の仕事は英語ができることと、タイプができることが必須でした。米軍は、技術を持っている私共を信頼してくれるよいお客さんだったと聞いています。支払いはいつも連番の新札だったので、通し番号を見れば、いくら受け取ったのか枚数を数えなくても分かったそうです。

クリスマスになると、父が基地から七面鳥をもらってきてくれました。初めてコーラを飲んだ時に、―たしかミッションコーラだったと思いますが―人が飲むものじゃないと吐き出して水で口をゆすいだのは笑い話です。

昭和27年に熊谷青年会議所ができたのも進駐軍が関係しています。当時は統制経済で、電気や電話回線が進駐軍に有利に割り振られていることに不満がありました。そこで町の若い人たちが決起して、進駐軍や東電や電々公社に公平な配分や増設を求めたのです。この運動がきっかけとなって、熊谷青年会議所が設立されたのです。

熊谷空襲 街包んだ炎

89歳 藤間さん

爆撃 防空壕の父が犠牲に

戦争の傷を聞こう

藤間さんの亡母、豊子さんは、熊谷空襲体験を最後まで「語りべ」としていたお一人でした。

新島章夫さん

（昭和21年生 銀座出身）

終戦当時12歳だった兄貴が、家計を助けるためにキャンプで働いてたよ。

三ヶ尻には引き込み線があったから、そこで貨車の積み下ろしみたいな仕事をしてたんだ。で、まだ子供だったから、雪降る中の仕事に我慢できずに泣きべそかいてたらしい。そしたらベッセイヤっていう兵隊が通りかかって聞いたんだ。「おめえ何してんだって、見たら靴も履いてねえじゃねえか、この寒さに」って。英語が分からないなりに事情を話したら、その晩、その兵隊が、革靴とか服とかたくさん持ってきてくれてね。それからも時々来てくれるようになったんだ。そんで「あの子はまじめだから、基地内で働きな」って。そのうちに英語も話せるようになってね。銀座の家で英語の塾を開いたこともあったよ。

うちの娘が外国人をうちわ祭を案内するようになったのも、そうした縁があるのかもなあ。写真は、占領時代のうちわ祭。左奥にMPのジープがあるだろ。戦後すぐに日本人が集まるのが怖かったと見えて、こんな風に見張ってたんだな。

進駐軍時代のうちわ祭。
場所は現在の鎌倉町の踏切近く。
写真提供：新島章夫

根岸千枝子さん

（昭和9年生 川原明戸出身）

初めてアメリカ人を見たのは戦時中。川本に米軍の飛行機が墜落したのを見に行った時のことでしたかね。バラバラになった機体の脇に遺体が、ぐでーんと横たわっていました。足がとにかく大きくて、こんな人と戦っているのだと思いました。

戦後、米兵を初めて目撃したのはキャンプ近くで。深谷に入院した姉を見舞いに行った時。キャンプの壁沿いに兵隊が歩いていました。初めて兵隊を見たもんだから、怖くなってね。すれ違わないように籠原駅のほうに遠回りして行ってね。籠原駅まわりで行くと遠くてね。それでよく覚えてますよ。

それと家に進駐軍のお偉いさんが来たことありましたよ。うちは大きな養蚕農家でしたから、それを視察にやってきたみたい。たぶん私は学校に行ってたから、良く分からないけど、お昼にうどんで、もてなしたみたいよ。

横倉勢津雄さん

（昭和5年生 妻沼出身）

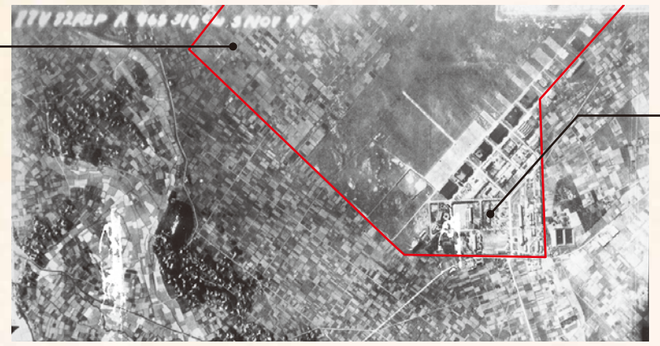
進駐軍が来てからは、道路普請に駆り出されたね。今の妻沼の県道。昔の道は悪いから、米軍が直そうとしたみたいね。手間賃目当てで行ってね。つるはしを振るったよ。道が見違えるくらいに良くなってね。はあ、米軍が来て良かったなんて話もしたっけ。

あとは大泉のキャンプに日雇いで行ったこともあったいな。橋を越えて歩いていくんだ。けっこうみんな行ってたよ。削岩機みたいので、コンクリートの建物を壊すの。米軍が新しい建物を建てるので、そのためなのかな。

そのあとは東武鉄道で働いてたけど、あんまし進駐軍とは関わらなかったいね。

■証言の中には、現代の価値観からすると差別的と受け取られかねない表現もある。しかし、当時の雰囲気を率直に語っていただいたものであるから、歴史的意義を尊重して、修正などせずに掲載をおこなった。文責は取材者にある。証言者の皆様には、改めて感謝申し上げる。

■本特集執筆にあたり、埼玉県立図書館「埼玉関係データベース」が大いに役立った。また、証言者紹介・資料提供など多くの方にお世話になった。航空自衛隊熊谷基地、埼玉新聞社、昭和館、三ヶ尻八幡神社、小川美穂子氏、須方紀光氏、田中嶺氏、藤間憲一氏、石山美江子氏、新島章夫氏、蘰原将氏、米良裕行氏。芳名を記して謝意としたい。



昭和22年の航空写真。右下の三角形の敷地が現在の熊谷基地。もともと滑走路があった左上の場所が、開墾されて畑になっている。
写真提供：三ヶ尻八幡神社

熊谷陸軍飛行学校時代の建物

航空自衛隊熊谷基地

広　報

熊谷基地は、終戦後の昭和20年9月から米陸軍43師団が駐留し、約13年間、キャンプホイッチントンとなりました。基地の前は、アメリカ街として50軒ほどのバーが立ち並んでいたといいます。チャイナタウン・ブルームーン・レッドタイガーというお店があったそうです。

アメリカ人の趣味なのでしょうか。進駐軍時代に基地内の建物は白く塗りなおされています。また、教会として使われた建物もありました。自衛隊発足後は、剣道場になった建物です。残念ながら、この建物の取り壊し工事が現在進められています。

写真は、取り壊し直前6月に撮影した教会跡地。
基地内には他にも当時の建物が残っている。

三ヶ尻八幡神社

篠田宣久さん（昭和34年生）

私の家は三ヶ尻八幡神社の神職を代々務めています。三ヶ尻飛行場ができた時には、近隣ということもあってか、我が家で地鎮祭を担当しました。終戦直後のことは父からよく聞いています。飛行場内には、基地内で亡くなった方を祀るための社があったのですが、進駐軍に占領されると社がどうなるか分からないことから、急いで社務所に移動させました。参道脇の駐車場の奥に鎮座している三ヶ尻靖国社の建物はそのとき移転してきたものです。現在、靖国社では明治以降三尻村の戦没者の御魂をお祀りしています。4月の例大祭に合わせて祭祀を続けています。

昭和20年9月撮影。社務所の前に仮置きされた社がある。
写真提供：三ヶ尻八幡神社